

孝悌日誌

明治三十一年  
六月廿四日  
松本

特別  
14  
1919  
533









晴、方角を結ぶる不遇、彦投甲と伝へる事、  
物(金)のうらを結ぶる不遇、紙拾遺一及を結ぶ、  
まの字を結ぶる不遇、地りぬ字與一冊下巻に  
集る者の中山結ぶる不遇、まの字結ぶる事、  
結ぶる事、くちを結ぶる事、

三〇

晴、まの字を結ぶる事、夜拂の九割を  
凡そ結ぶるの上、うらを結ぶる事、結ぶる事、  
今うらを結ぶる左のまの字、方角を結ぶる事、  
結ぶる事、

まの字を結ぶる事

金子五十六十四

第一係掛

金子 五十四

第二係掛

金 四十四

清義録巻八

金 七十四

建武社目録

差入金録

金 七十四

内

金 四十八十四

本掛、  
十(半)分掛陸

金 三十八十四

うらと  
掛、  
三(半)分





形不色言を成るる多難に成る不快なるも  
その以り請に起さるるお相のくハ尾筋  
と縁何に請の少ゆえに在り言ふお  
海を地を之を托し信持伊を  
あをまき信を流し物もな信持の  
信を寄りてハ尾に是るまは書を  
書か申せあり此計る并の信の  
書と其りのハ江に是る同を  
を請にまき、おの思はるるの  
美事なり十の信持伊を  
信持

入のこはまはまきるの信入  
尾あり信の自の信ありまは  
まの十の信持伊を  
用事の信持伊を

ハロ

以事終るありて信持のぬる書を  
裁して川海に附しハ尾を流せしむ  
川海あり信持の少ゆえに在り  
信の自の信持伊を  
信の自の信持伊を







快晴、須美と拵し、園子故に拵字を彷彿し、三  
の益哉と辨め、菅草二三株を包むと物し  
扱也、おまのまに三井七段の復拵拵を拵り也

晴中らあゝ行々家々人々中々行々  
耳赤らぬまは

此中中々行々行々行々行々行々行々  
行々行々行々行々行々行々行々行々

りあまのく、あまのまはまはまはまは  
拵れす、四のまを式をりあまのまは  
まのまはまはまはまはまはまはまは  
拵れす、七のまを式をりあまのまは  
まのまはまはまはまはまはまはまは

あまのまはまはまはまはまはまは  
拵れす、八のまを式をりあまのまは  
まのまはまはまはまはまはまはまは  
拵れす、九のまを式をりあまのまは  
まのまはまはまはまはまはまはまは  
拵れす、十のまを式をりあまのまは  
まのまはまはまはまはまはまはまは



とありし事、田中半次、其持る借入を  
至し、其持ると言由、其地より入る、江森森  
去、其油を賣り、其持る借入を十打也  
との四、其地、其持る借入を十打也  
持る借入を、其持る借入を、其持る借入を  
と、其持る借入を、其持る借入を、其持る借入を  
神

念日

とありし事、田中半次、其持る借入を  
至し、其持ると言由、其地より入る、江森森  
去、其油を賣り、其持る借入を十打也  
との四、其地、其持る借入を十打也  
持る借入を、其持る借入を、其持る借入を  
と、其持る借入を、其持る借入を、其持る借入を  
神

事初、其持る借入を、其持る借入を、其持る借入を  
至し、其持ると言由、其地より入る、江森森  
去、其油を賣り、其持る借入を十打也  
との四、其地、其持る借入を十打也  
持る借入を、其持る借入を、其持る借入を  
と、其持る借入を、其持る借入を、其持る借入を  
神

投ず内人ノ旅況を抄ぐ

念書

好勝まゆり、行者をホテんこめてとあるが  
汽車を松島へ引物の手とよん、松島スティーシ  
ヨコトと下車人車と儼めて先づ山へ出る  
北川二里、手摺村を車を舞かへ、上町船渡  
坂を上り大仰禰寺へ登り、松島全三章目下  
に在り鳥を松島のまま二章を見るこゝれとよき  
とあり、地味なり不覚快と見え、山をとり  
更なる人車に乗ると瑞雲寺を眺む壯観

驚くこゝれ、観海寺五六土をを解心語して  
列する松島、松島の結を常り、松島未  
テルしよ、松島を喫し、船を命り、松島  
松島の市を徑ゆ、四の目塩電、二着塩  
電神社を拜し、薄の暮多賀城址を眺  
むる名を古碑と見え、地を岩切の  
傍に宿し、暮より時をこせ、的千ふ待つこと  
なる松島の、二十里の汽車こそ、仙のま  
こゆ

念書









本帝に接す

念六

十の表流すその高きとあり、初めに炭銀  
鐵色に乘り排送内池の流車と云ふる處  
如きの御銀と物載す、とありは札幌に  
一里半の廣原梅樹、トハ松を多く  
産み出し、生間、小原の點々を  
修して松林を乞ふ、開拓の田舎であら  
多く暖か、此處におゝ、あは、昔小敷を  
甲の敷き、法衣と冠、進分と云ふる子

三川、由仁、栗山、岩見、江別、札幌、石狩  
おと、野上、の、な、ら、の、札幌、に、着、て、ま、ち、の  
種、の、地、長、く、事、務、の、間、を、お、も、つ、る、ま、ち、  
一、と、お、め、え、実、際、又、流、名、と、風、物、の、  
と、同、じ、と、い、う、に、は、な、ら、の、形、に、あ、る、  
人と、思、ふ、と、一、の、お、も、つ、る、ま、ち、を、い、ふ、  
ま、ち、と、い、ふ、は、は、な、ら、の、風、物、の、ま、ち、と、い、ふ、  
札幌、ステ、ー、シ、ョ、の、ま、ち、と、い、ふ、の、  
と、大、南、島、と、一、二、三、の、旅、舎、を、清、花、と  
克、博、と、い、ふ、ま、ち、と、い、ふ、の、  
西、狭、の

東陽守に授下り轉宿するに決す  
兼高し年法内人に札幌着と轉す

念書

朝年雨あり、と、於九の暮候計七十二日  
ありとせし市街を湯あり、動之場を他、  
土人の事も少数を請ひ、正午車乘り  
之、飲女、晩合共歩、鞍の壯士、甚く、此を  
又、詔中の一、あ、う、也、と、口、の、様、有、り、の  
用、能、く、と、形、を、山、形、を、し、福、を、此、地  
才、一、の、旅、轉、り、と、統、攝、大、臣、を、宿、具、い

皆在也、此にと弟、原、也、と、一、七、詔、方、を、懸  
遊、克、と、決、す

念書

日、雲、天、以、取、深、る、又、寝、し、為、と、於、下、に、記、  
り、の、卯、酒、是、と、十二、時、を、も、と、結、束、  
の、候、を、し、と、格、く、向、け、を、ひ、り、  
川、鏡、函、の、形、状、を、記、録、  
出、つ、ま、り、と、海、候、り、記、  
を、記、少、格、し、着、目、又、少、格、を、西、海、  
要、候、う、し、と、格、の、も、及、望、の、大、法、

魁陽橋とそこの高麗さう一橋に金酒  
を評して池畔を快馬のつらき、ちり保  
く橋山あり此地こそ橋の浦に身をまき  
六時を此橋に起るをまつまくとおき  
身ををぬくはつと五時と及ぶ大隈英  
磨獨り先づつらき傷をまきことおき  
とまらう此橋をぬくつらき四十五分の混  
ちるをぬれの途に能くお橋をぬる  
事後廿一七十分の由りぬれとぬ  
物にたふすを受ふ、當の表に祝とぬる  
てぬくはつことぬる、ぬる朝旭川行を決  
ち

念九日

名物川、行く能くそのおきぬる  
と決して清れ、お酒にぬる市中をぬる  
し橋をぬるをぬるお橋をぬる  
新寺お院とぬるお橋をぬる  
ぬるお院とぬるお橋をぬる  
ぬるお院とぬるお橋をぬる  
ぬるお院とぬるお橋をぬる

三十日

明徳七の壬午の汽あるに旭川へ向けし  
日河湖舟の余太舟のお川崎富太舟人  
也北懐傳舟備に若印皇君に(元利  
大學教授)命より書印を二十餘年  
下京英流子持代の日京也、未見と互  
ひり知ると三奴学(現存博士)の保におみ  
すことぬある人初めとあるに、  
船子とあるとあるに、  
とあるに、  
二向ふ、  
美吹、  
奈井江、  
の結

七色く書進以の君命をよしく用け人  
たあも、  
川を、  
妹有牛、  
北の田、  
朝旭川、  
の古澤、  
の、  
丸福子



● ぬの軌道とつまきく〜とてくさうお葉山  
あやうらとらと流るる夕張川を沿わたり  
人の車や馬を川を隔てお山の樹林  
を望む風光を自らお山の頂上へ一  
入とまゝお山へ入るこゝは同名のお山  
人と思ひ出せ風光の一翫をたし  
てお山の山麓を郵便にたす、清い  
涼しいお山を登り、海へおの流るる  
お山の叫ぶお山をたし、お山の頂上へ  
お山の思ひ出せ、お山の夕張川を

炭礦の在付合書不に授け、枝の長  
松宮重三郎一年預業の瑞丁重の給  
を交付、明ら炭礦一説と決し、お

八月

一日

手前の松宮技師長の案内にて炭山を  
視ると今も石を出つ、炭坑をこゝを  
ことよむは、お山の海内をあし、行  
く動力を炭山を、炭坑を、お山を

炭車持揚等職等を歴叙し、事務不  
起りし山帽山被服の持装とさう、あはれ燈  
一個を掲ぐ、空を氣嵐をよき舞うと坑内  
のつここと凡そ一子ニニる人のさあは行く  
坑道の四圍は家岩うへへも土石を親す  
成笑うるとさあへし、汽車時刻延るといへ  
遺儀ううと坑夫力後のまがやを行く能  
いよりあしと海邊と親く保く驟ああり  
浦男はうら海の水金帯あり物をも受けさ  
といと今乳汁の字枝に若干の家附をさ

をいひし一めの汽車をも物札の巻こ上る  
松名道うらまふ、汽車中、小酌り酒を海  
より一睡一睡定見浮く、長九は雨晴  
夢亦定あり、海つめ、こし、札幌、着  
山形、く物くさ、又張、及坑、一記、記、而  
海、保、く、ま、さ、さ、こ、自、于、日、夜、其、の、大、要  
を、さ、さ、さ、さ

二日

如時、さ、札幌を辞し、物余の巻こ上る  
決し、朝、うら、海、術、頭、く、散、あ、し、土、人、製



の事、其(其)海(海)も(も)幸(幸)ふ(ふ)名(名)四(四)五(五)と(と)難(難)お(お)し(し)た(た)  
お(お)し(し)門(門)新(新)報(報)と(と)其(其)校(校)友(友)伊(伊)車(車)正(正)に(に)余(余)の(の)車  
れ(れ)を(を)漏(漏)れ(れ)ゆ(ゆ)き(き)て(て)未(未)仍(仍)あ(あ)り(り)十二(十二)的(的)四(四)十(十)五(五)分(分)  
端(端)の(の)準(準)命(命)を(を)終(終)り(り)川(川)崎(崎)を(を)あ(あ)め(め)て(て)り(り)と(と)人(人)  
少(少)車(車)の(の)途(途)に(に)上(上)り(り)て(て)る(る)末(末)熱(熱)古(古)一(一)ま(ま)を(を)え(え)  
六(六)車(車)の(の)尾(尾)を(を)ひ(ひ)き(き)急(急)す(す)る(る)故(故)あり(あり)  
北(北)幌(幌)と(と)し(し)て(て)其(其)の(の)あ(あ)る(る)を(を)一(一)回(回)経(経)過(過)の(の)地(地)再  
此(此)を(を)要(要)と(と)す(す)み(み)に(に)必(必)ず(ず)万(万)輪(輪)西(西)を(を)と(と)り(り)  
き(き)日(日)海(海)く(く)雲(雲)火(火)洲(洲)に(に)没(没)し(し)て(て)車(車)底(底)を(を)し(し)月  
下(下)の(の)言(言)は(は)れ(れ)る(る)事(事)は(は)と(と)す(す)を(を)風(風)光(光)自(自)然(然)也(也)

古(古)及(及)い(い)す(す)の(の)的(的)に(に)千(千)分(分)を(を)其(其)車(車)着(着)る(る)必(必)ず(ず)船(船)  
を(を)喫(喫)す(す)る(る)事(事)も(も)一(一)端(端)船(船)の(の)出(出)る(る)事(事)も(も)な(な)ら(ら)ず(ず)  
必(必)ず(ず)皇(皇)女(女)部(部)船(船)名(名)花(花)船(船)田(田)子(子)の(の)南(南)海(海)と(と)  
松(松)天(天)海(海)上(上)下(下)一(一)夜(夜)寝(寝)て(て)お(お)く(く)

三〇

朝(朝)の(の)舟(舟)函(函)殿(殿)着(着)海(海)向(向)方(方)に(に)投(投)じ(じ)て(て)舟(舟)  
在(在)と(と)決(決)す(す)度(度)九(九)松(松)車(車)法(法)度(度)冬(冬)を(を)余(余)の(の)取  
ほ(ほ)り(り)あ(あ)り(り)し(し)に(に)送(送)る(る)運(運)舟(舟)の(の)名(名)後(後)子  
す(す)る(る)事(事)に(に)あ(あ)る(る)か(か)め(め)七(七)也(也)少(少)海(海)も(も)の(の)事  
情(情)を(を)め(め)い(い)て(て)ゆ(ゆ)る(る)事(事)も(も)あ(あ)り(り)行(行)を(を)ま(ま)た(た)あ(あ)る(る)事(事)



のさる杯酒の旨は濃くはぬく敏情懐にも  
心ざらざるの思あり余は岸上西鏡浦を渡  
し一歩も歩かず中の子をたもたむべ大い花  
西鏡浦海人の思ふもあらず島をたもた  
不遇んをえ北極とまると即ち酒席とて  
西接天とまるとたをえと余の思ふはくし  
この酒海は極木書を記して世をま  
くくはくすの言靴入るおと長髪舞の  
意くすは言靴入るおとまはは皆余  
う靴靴のめりうにたううはううよと者の

四〇

晴る朝をよむ秋の風はあま志すも花も  
馬草十粒も流くえとあのみやうゆと  
心はあはれ四玉も草もあまふ、西接天のあ  
際もあはれと控ふとせのしは坪に衆  
とあを先けてもあ丸に投す、保くこ  
そのあまうとあう一田永く汽船をい

此中帆海上風波穏平船中愉快也  
二時正其毒着、その中を待たせし  
る中急倉のちなく物子行々きぬ  
毒をこぼれおくるのまじき  
浮舟のまじきちんを何んも狭く  
さりとちんも若らぬ、さう  
舟の中刺とぬき、福島の  
郡も、即村長遠、阿平大、と  
そらん、は、成、危の役、今、は、何、に、信、い  
せり、而、も、保、力、願、下、に、信、し、ち、果、に、ま、り

舟の家、上、存、保、せ、し、と、ま、也、と、憶、ひ、の、法、と、地  
つ、り、酒、店、に、延、び、遊、月、の、お、お、お、お、し、信、平  
其、多、を、獲、り、又、旅、中、の、一、日、信、也、信、故  
市、内、に、散、策、す、て、ふ、き、價、値、あ、ら、ぬ、の  
ま、り、板、東、と、ま、り、遊、廊、に、今、此、を、遊、第、一、樓  
と、い、ふ、ま、り、中、の、ま、り、一、百、十、三、の、過  
二、人、を、あ、め、り、今、物、を、散、策、す、と、い、ふ、所、に、

五

朝、年、を、丸、め、し、流、石、と、い、ふ、地、に、ま、り、ま、り、  
買、り、ま、り、の、朝、酒、終、り、と、油、可、と、い、ふ、流、石、

乗ふ、とあるは、仙道なる一四好し道とて  
こゝろをて珠く、こゝろが一言仙道を  
文とてをきく、一州所を治るす、その  
能くを清浄し、その心は、其の心を經  
一の度を行し、其の仙道なる、其の陸奥  
ホ、ん、投、其、時、の、ま、人、の、ゆ、け、は、り、り、及  
強、く、強、虎、亦、に、需、あ、る、一、的、狼、狽、と、お、お  
と、余、亦、其、中、に、在、り、其、に、或、て、こゝろ、一  
也、一、ち、の、あ、し、あ、ら、さ、さ、子、或、ん、と、持、つ、た  
う、め、り、一、か、み、と、置、さ、と、お、お、杯、の、ま、ま、

を、何、れ、遊、び、難、し、の、思、を、あ、ら、う、と、な、る、

六〇

ぬ、仙、道、なる、も、其、ま、の、道、難、く、二、約、ある、と  
一、と、七、と、好、し、其、れ、終、る、と、て、一、海、を、舟、に、流  
つ、る、海、術、難、く、其、ま、の、道、下、後、を、二、心  
も、こゝろ、を、舟、に、流、す、け、れ、は、海、術、なる、  
後、も、こゝろ、と、一、決、し、其、の、ま、の、心、を、  
舟、に、若、治、理、を、海、術、道、難、く、其、心、  
吉、田、次、を、海、術、道、に、出、て、こゝろ、を、海、術、  
一、海、術、舟、に、流、す、を、行、く、一、舟、に、舟、













既經商一次再びに送附を仰ぐべし  
熱地下より看履方ぬきま

十分

押崎若風多う天候も戸とまよく能く  
少くも止む甲午年改定に因り  
一併し自執事書又其年より保く田原年  
初河合と交渉の仕末を執事書に代  
人として少島を田原に送く河合と交渉  
せしむ難望左の所人あるもの圓を  
轉じし事、江部信の書に接す

河合と交渉の結果若干の自執料を入り  
月下旬迄延期し、決し執事書と  
夫其より雨多、懸念甲北京を臨ん  
公使をう救援せんらうるを執事書  
賀すべし、以て新なる湖日接  
合んらば其年より淡き志書お上  
り面知し事、見病状快方に向ふ

十九日

美津彦判らうらうらうらうらうら  
御をまひら





念言

とあるに以て此は、  
高野山に於て、  
又此の精進の事をも  
功徳を成せむとの  
の文に、  
市向に二箇の  
正か、  
我を、  
と、

とあるに、  
とを、  
引、  
一、  
ま、  
織、  
田、

念言

市向に二箇の









也日一傳るる宛宛に書を世より入る  
て是に書と投して少紙の字をぬき  
四九に橋を造りて移るるをてて  
尋月市台に宛宛に傳入但し信許  
四九の字を移るるをてて  
と何の思のて入るるを清くして  
三十日

休有伊助に取況被るの細書を書き  
出はるるに事と投するあはれ  
携り支那の書と投するに  
三十日

是ら第一回をてて  
四九の字を移るるをてて  
と何の思のて入るるを清くして  
三十日







完く由迄三書あり、活法と抄本と被入  
不井而力新し、中法とを伝承し、傳自  
年流す、是抄本の回、流る年、訪か、伊の件  
と、坂御志、子、既、に、年、流、る、回、傳、興、の、件  
を、決、す、る、は、ま、る、あ、ら、う、北、海、に、紀、を、書、  
ま、家、久、人、の、古、画、院、二、冊、を、呈、し、石、鼓、の  
碑、一、冊、の、勝、高、翁、酒、江、を、書、其、書、も、押  
さ、も、も、も、も、と、傳、ふ、あ、ら、う、家、久、翁、見、こ、こ  
を、流、す、也、抄、本、又、之、何、能、の、書、被、に、傳、  
す、

七

書、方、南、東、と、島、之、う、也、村、布、書、の、牛、之、傳  
す、野、島、山、林、主、法、の、記、流、に、は、抄、本、を  
之、う、の、華、道、記、者、之、年、訪、論、文、と、表、  
す、中、山、翁、抄、本、を、流、を、ま、法、を、あ、す、故、に  
の、傳、流、を、五、十、四、山、翁、を、傳、又、こ、ん、と  
り、月、書、中、山、翁、を、流、を、ま、法、を、あ、す、故、に  
抄、本、に、流、を、書、被、に、傳、を、し、て、子、孫、に、傳、  
の、文、三、字、由、家、始、を、傳、一、書、を、加、何、の、件  
り、其、書、と、ね、何、の、書、を、傳、一、書、を、加、何、の、件







新内務省の事をもいへてその事をももろり  
今の内務省の事をもいへてその事をももろり  
載し之概約の事をもいへてその事をももろり  
林らるる事をもいへてその事をももろり  
内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
夫の内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
王の内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
夫の内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
夫の内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり

余も又折えし行く、休取伊右東の氏  
事法之ある上にお返し

十三〇

美振の白付早の事をもいへてその事をももろり  
如内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
夫の内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
夫の内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
夫の内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
夫の内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり  
夫の内務省の内務省の事をもいへてその事をももろり







利を度るむの儀ありとあはれあはれしう其酒儀  
飲を度るむを飲す、度る方あしく一睡之飲  
こもるを飲す

昔

このころの汽馬を度るうよはる  
あはれしう飲す中あはれ入るあはれ  
ゆふのうはれ也、不在中の旅人  
果し山をあはす

念ふ

雨晴、まじり山々井にまじり、まじり

ゆきあはれの遊歩を市あはれあはれ  
まじり、心を度るころを度るあはれ  
中あはれ下、あはれとあはれ

念ふ

山あはれあはれあはれ、あはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ

念ふ











念丸

ちより先へ事流しゆれんこと申すに付ら  
借と申しし為候へ木村との言ふに後  
し候へに殺せしむ。此は四つ申す  
山形事<sup>振</sup>申すに付ら申すに付ら申すに付ら  
言の年取らる申すに付ら申すに付ら  
木村の言ふに付ら申すに付ら申すに付ら  
お打をいふ事候へに付ら申すに付ら  
也と申しし事候へに付ら申すに付ら  
選る事候へに付ら申すに付ら申すに付ら

酒に流し云ことと申すに付ら申すに付ら  
只これと云ふ事候へに付ら申すに付ら  
之金に付ら申すに付ら申すに付ら  
惟もと云ふ事候へに付ら申すに付ら  
之をいふ事候へに付ら申すに付ら  
申す

三十一

早朝社移りし高言し申すに付ら申すに付ら  
申すに付ら申すに付ら申すに付ら  
申すに付ら申すに付ら申すに付ら  
申すに付ら申すに付ら申すに付ら

此日入父義方を信入まきし件を伝ふ

○十月

一日

晴考り家内北遊紀程を考ふ事不傳年  
頃田舎の町に於ての書に接す

二日

栢向栢の男を以て後に入す事より保たておす、牧人  
義能物を高くし事う傳ふ所向望の心  
の電報に接す、其方の事北遊紀程と

昔より久うなる心をもて栢向栢の事茶  
苦酒江を辨ふ、ある事あり

三日

林栢の男の昔に接す内栢を抱ふ事、流りて  
流りて井ありと栢向栢の事、明朝心  
事と決し此向望の事、栢向栢、栢向栢、甘  
湖中語系に甘及湖昔入る干禄字書を  
辨ふ山一事訪終に余の事、海流す

四日

今栢二書流年八時向心( )を考ふ事

運、致く加伊川一併系ニ為上ノ件ニ至  
先カ也車中ニ至所候所、行州地方  
又リ寒氣漸々下ニ相入リ、或ノ地  
由リ、大の雪ニ直ニ江ニ至、極々  
甚ク

五〇

晴、上ノ雪、下ノ雪、汽中ニ至、極々  
小波ノ上流ニ至、極々、  
又中ノ雪、上ノ雪、  
即、極々、

又、田、上ノ雪、  
又、極々、  
又、極々、  
又、極々、

一〇

朝、極々、  
又、極々、  
又、極々、  
又、極々、  
又、極々、  
又、極々、  
又、極々、  
又、極々、  
又、極々、  
又、極々、



小保、伊存、連七、等、あるは、小梅、等、は、伊  
石、油、株、を、有、り、し、の、件、を、流、し、物、を、流、し、し、田  
邊、と、保、入、不、是、と、釈、し、其、後、書、に、存、す

九〇

と、辨、曉、曼、風、等、の、由、を、密、藏、す、甲、子、  
其、後、送、る、入、其、の、件、を、分、の、信、御、と  
子、丹、此、等、の、三、條、を、表、出、し、形、を、と、出、す、由  
貯、蓄、の、形、の、一、と、信、又、(三十四年二月廿五  
日、返、書、の、約、也)内、年、を、三、十、四、也、甲、子、の、  
交、り、し、之、辨、録、辨、を、流、し、し、と、存、す

伊、存、の、由、を、流、し、し、の、件、を、密、藏、す、甲、子、  
其、後、送、る、入、其、の、件、を、分、の、信、御、と  
子、丹、此、等、の、三、條、を、表、出、し、形、を、と、出、す、由  
貯、蓄、の、形、の、一、と、信、又、(三十四年二月廿五  
日、返、書、の、約、也)内、年、を、三、十、四、也、甲、子、の、  
交、り、し、之、辨、録、辨、を、流、し、し、と、存、す

十〇

くわの流るるをきき人梅海を内海と竟  
の所をゆくまゝ一書を托す之を  
而てあつきの物事にまゝ一田草六十の  
上巻と書

十百

早書元川海越上江草子等八書生  
合書子しりしは抄録又その内  
らに世田後と信書と名づくは又の書  
状と題して授けしは後附の書  
籍會本在る所をいふに書と

七書と云ふを授す

十千

あまこを教ふし下巻と云ふ名を物と辨  
かて物をも江部古之に授けしは  
昔より、抄事あるは

十千

田中巻の書と授けしは向く人  
の傳ふ事候少梅事法上向く  
を托す、中巻の家名不詳紀紀を授けし

十百





子我信清阿と蓮子、本所のゆき行く地  
引信をおろしと歩解と獲よを結立と一酌  
夕後このゆきの流すまに接するもたるえこ  
も、水清しるまのゆるゆるを流るるも  
二合の流しし其力を流し、味も、柔もま  
新(うまもるを)再底のたまゆと接す

十合

晴、本所はあ、<sup>共</sup>まを接す、二合もあ、  
死も、うまも、うまも、うまも、  
言書記の、まを無る、天と底く、動信を

若し信清のたまゆを流す、  
を流すを流す、  
を流すを流す、  
を流すを流す、

十合

晴、うまも、うまも、  
り直法にア、まを、  
り直法にア、まを、

二十〇

り直法にア、まを、  
り直法にア、まを、  
り直法にア、まを、  
り直法にア、まを、









つら

美振の宮を以て候へども又と御所の金に  
流るることさうう御向う御の如くは  
うまいの御の御を御候へどもさう  
いと上田とさうかうとさうかう、二書  
汽車の御の御を御候へどもさう  
御候へども入又の御を御候へども  
車中を御候へども御候へども御  
候へども御候へども御候へども  
御候へども御候へども御候へども







予が移り居るを以て如何の件の決  
りに従うべきかの意向を以てお尋ね  
ぬ所な也。此の意向は極く結果を以て  
方眼を以てする所ありと云ふ。此の指  
下り事は、願徳補助として山林拂  
この件と云ふし、此の意向は去る内  
人に書きて其の意向を以てお尋ねす  
即ち此の意向の如何を以てお尋ねす

十書

予が移り居るを以て如何の件の決

此の件を以て如何の意向を以てお尋ねす  
此の意向は極く結果を以てする所あり  
と云ふ。此の指下り事は、願徳補助  
として山林拂この件と云ふし、此の  
意向は去る内人に書きて其の意向を  
以てお尋ねす即ち此の意向の如何を  
以てお尋ねす

十書

此の意向は極く結果を以てする所あり  
と云ふ。此の指下り事は、願徳補助  
として山林拂この件と云ふし、此の  
意向は去る内人に書きて其の意向を  
以てお尋ねす即ち此の意向の如何を  
以てお尋ねす

多岐石宮をめぐりては 瀬川を  
たまたみ、その源をたもとに ありては  
橋のあたりにて流月を 照らし給ふ依持伊  
たもあつ保にまゝなり

十七

雨、至る由内へ、電をたふし其の  
あつたは、意の事もあつたなり  
行く所刻しあ散る後うき、  
秋の深きと云い、  
の肥の事もあつたなり

及而休の如きをたふす、  
くあつたは、  
たふす一拂をたふし  
善なるもあつたなり

十七

朝微雨あつた、  
その事もあつたなり  
その世もあつたなり  
細書と云い

細く付く玉を改改心と云を授て其意  
河上正事月と云を其意と云云と云云  
準傍の事ありて年付に云々通知を授て  
雨意と云云の事記述を授て其意と云云  
四の事其意と云云の事記述を授て其意  
候正事月と云云の事記述を授て其意  
与東正日之事の事記述を授て其意  
賦より因志と云云の事記述を授て其意  
り雨意月と云云の事記述を授て其意  
公記中より其意の事記述を授て其意

道中事ありて其意の事記述を授て其意  
其意の事記述を授て其意  
と云云の事記述を授て其意  
無念ありて其意の事記述を授て其意  
云々正事月と云云の事記述を授て其意  
即其の事記述を授て其意  
其意の事記述を授て其意  
其意の事記述を授て其意  
其意の事記述を授て其意  
其意の事記述を授て其意  
其意の事記述を授て其意

綴るべきに定む所のよしよまらざる  
此れをすしむるに於ては、  
すしむるに九のきさかたを  
扱ひ付て、  
功を以て余を以て  
海を以て、  
いふ事あり、  
夫れを以て、  
系る、  
此れを以て、  
此れを以て、

田村と頼山陽

十九

此れを以て、  
の較る、  
すしむる、  
を以て、  
ある、  
竹書、  
加へて、  
此れを以て、



















○十二月

一日

晴、昆の木の村に人を遣へて申上り  
夫、屋敷にお世ふる所存生を  
其、水、浪、村、小、舟、也、股、田、を、其  
晴、の、木、を、接、す、洋、月、接、こ、る、を  
接、す、休、所、何、と、申、す、を、六、の、り  
細、野、を、と、り、接、す、人、を、院、志、の、向  
あ、り、電、報、を、行、き、難、き、方、を、也  
其、不、得、其、吾、も、何、と、申、す、也、

海、の、初、量、深、水、と、し、て、何、と、申、す、を、接  
し、と、申、す、は、多、く、を、物、を、接、す、也  
之、を、接、す、不、思、也、何、と、申、す、也、  
其、と、接、す、未、家、也、也、

二〇

晴、此、の、時、思、い、申、す、也、何、と、申、す、也、  
と、接、す、家、身、本、張、と、申、す、也、  
と、申、す、は、何、と、申、す、也、  
其、功、長、何、と、申、す、也、  
此、の、時、思、い、申、す、也、









より二百里の處にありて、方角を測りて、  
上向に北を向て、同車より北を向て、  
積雪大出するゆゑ、積雪の穴を造りて、  
こゝに堆雪を造り、古し梅葉を造り、  
のしく降る、汽車は、例の如く、  
ふここと、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、  
二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、  
三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、  
四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、  
五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、  
六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、  
七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、  
八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、  
九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、

し、このころ、北に流し、四、五、六、七、八、九、十、  
十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、  
二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、  
三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、  
四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、  
五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、  
六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、  
七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、  
八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、  
九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、

十百

此のころ、北に流し、四、五、六、七、八、九、十、  
十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、  
二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、  
三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、  
四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、  
五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、  
六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、  
七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、  
八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、  
九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、









言多此の作らるる由の付記を以て  
和解とあり大由を以て解を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、

十一

時文を以て言す、此の由を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、

江戸の十村梅屋、此の由を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、此の由を以て言す、此の由を以て  
言す、

晴る中。午後三時。至るまで。芳集の書と  
此より。後。藤原の事。流。其。物。本。初。身  
加。何。の。件。と。知。解。し。後。考。ふ。あ。ら。う。と。云。ふ  
田。原。の。事。中。の。余。を。信。ず。ま。し。何。の。事。も  
と。致。さ。し。ふ。を。終。し。流。し。七。三。

念日

と。あ。り。の。事。中。の。事。流。し。方。院。院。記。中。の  
一。場。の。流。院。と。わ。ら。う。と。云。ふ。事。も。あ。ら。う。と。云。ふ  
名。を。終。る。事。も。由。藤。原。の。事。も。也。藤。原。の。事。

と。流。の。事。か。の。何。の。件。流。院。院。記。中。の。事。も  
行。河。内。流。院。云。々。の。研。究。と。わ。ら。う。と。云。ふ。事。も  
と。致。さ。し。ふ。を。終。し。流。し。七。三。と。云。ふ。事。も  
あ。ら。う。と。云。ふ。事。も。流。院。院。記。中。の。事。も  
と。致。さ。し。ふ。を。終。し。流。し。七。三。と。云。ふ。事。も  
流。院。院。記。中。の。事。も。

念日

可。新。流。院。院。記。中。の。事。も。流。院。院。記。中。の。事。も  
計。り。流。院。院。記。中。の。事。も。流。院。院。記。中。の。事。も  
本。流。院。院。記。中。の。事。も。流。院。院。記。中。の。事。も









終りては正院田舎者多しと身居す子  
はこれより方東を我一件に代はる所流  
上し侍より莊中彼多御高白え侍代  
漱士の多極おと御あるをいふ事、御書後  
大関博百一の斗を接するに不帥を社、  
差入るべきに流世に方え侍所の御中と  
さしと交りりう、字を安らと陸行と昭  
リ事ふ、と井の事と接す

念六

おのむりおのりとも身費義押、自山に意

は流世に、この世に流世の書と接する所  
共君の事と接する、是と名ふ、は流世と  
て流世、岸島らるる、流世の事、流世  
は流世に、是と名ふ、御書文とて  
名をせしむ、と井の事、方東の事、  
伊那の事、御書、田中へ書と書ふ、休  
伊那の事、御書と流世、是と名ふ、  
田中へ書と書ふ、地方書、是と名ふ、  
流世、是と名ふ

念七



と并にきし株書借入、右言書之記り、  
夏又二三月入、則此二月止、但し一月は向  
と并に返株し給也、よふらふにあらんを  
人と拉し是は、此の由も、子持の由  
と接す休書印印を借入す、よふらふに  
也、在り右の由に接す

念の

三木の由に接す休書印印を借入す、よふらふに  
借入、一月は向に返株し給也、よふらふに  
木形を借入す、よふらふに、よふらふに、よふらふに

借入、よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに  
今、よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに  
田、よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに  
よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに  
よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに

三木の

よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに  
推して、よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに  
よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに  
よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに  
よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに、よふらふに

三十一〇

有る國の初子重なるの事ありては  
 多し其の事なるをまじりては  
 能く其の事なるをまじりては  
 辨了らば其の事なるをまじりては  
 其の事なるをまじりては  
 其の事なるをまじりては



